

インディアンになりたい願いの奇跡各層と作品構造

——カフカの翻訳の問題——

作家と作品 その楽しみのすべて IV

南 剛

一

カフカの、生前に出版した数少ない著作のうちのひとつである『観察』(一九一三年)は、カフカの初期の、短篇集である。カフカ初期の、筋もはっきりしないままに叙述の流れのなかに別個それぞれのイメージ群が取り込まれたような「ある戦いの記録」から、その個別イメージ群を単独のものとして取り出して、やはり発展性はないままもうそのままその単独のイメージの断片的なそれでもミニマムなまとまりのようなものとして、置いておかれたような諸作も、そこには、含まれている。この集に収められた短篇「インディアン

になりたい願い」は、そのなかで、——ことばつきに魅力はあって読者の気にかかるものの、またどういう構造でなにが言われているのか必ずしもよくわからない(というのも、とりも直さず日本語への各翻訳を見ても、どういう構造でなにが言われているのかよくわからないのだから、少なくともそれらの翻訳においては、そのようにまさしくよくわからないものというように解釈されているものであるということに、ならざるをえない)——というかたちで、ただなんとなくあっさりしたさっぱりした感覚を持つなものかであるかのように読まれてきたはずだが、——じつは、きわめてカフカ独特の濃密な内容と精密な構造をもっている作品である。

この短篇「インディアンになりたい願い」が持つ、その濃密な内容と精密な構造は、そのそれぞれが、いわば、カフカにおいてじつはしばしばあるような、およそ通常では無理なことを綱渡りのような構造によって可能にする、奇跡のようなものであると言うことができる。——あるいはもとより、それをわざわざ奇跡とまで大袈裟に言う必要は必ずしもないのである。——ちよつとした、ふつうには不可能な綱渡り、なのである。

だが、それが、まるでそれだと通常の道理がひっこみかねないほどの無理を、いくらそれがちよつとしたというだけのものであるにすぎなくとも、可能にしたものであること、——そして、その個数じたいもべつにここで述べるようにむつつと同定する必要もさらさらないのだが、むつつにわたってつぎつぎと繰り出され、それが緊密な構造をさらに組み立てつつ全体の意味をなしていること——により、それをここでは、この作品を成り立たせているむつつの奇跡と言っておく。その、《むつつ》が、ことにそれらのうちははじめはなにほどもないほどのことが、全体の中で緊密に組み合わされて、全体の意味をなしている。その中で、はじめのなにほどもないものも合わせてむつつにわたる奇跡の一環としておくことが、生じていることがらを見やすくさせるのである。

この「インディアンになりたい願い」の話は、ともかく、ドイツ語圏の土地にいる子どもが、インディアンごっこに、ごっこの装備なにもなしで、成功する話である。

和訳のうち、ここでは、新潮社の旧版新版二種類の全集と、大学で用いられている初級用の教科書に発展的教材部分として訳や説明込みで取りあげられているものの和訳一種類と、また手近な各文庫本および新書判白水Uブックスのもの三種類との、全部で六種類を、参考までに取りあげる（それぞれ、むつつの奇跡に相当する箇所のうちろくに括弧をして1から6までの数字を付す。元の版にあった振仮名は省略）。

まず、原文をフィッシャー文庫版旧全集七巻本の一巻目（一九七六年）により挙げておくが、プンクト（ピリオド）で終わる文の切れ目もなく全体が一文で勢いよく続けられている。はじめの主語の不定代名詞は主体を表わすだけであり、のちに論者がふれるさいにもこれらの訳と同様ぼくとするか訳さないかとしておく。定動詞の省略や文法上通常は当然に必要なである主語の省略などが、いくつか、明確に省略がわかるかたちで、用いられており、単純な省略から由来するような種類のわかりにくい箇所、誤訳を呼ぶような箇所は、ほぼない。

Wenn man doch ein Indianer wäre, gleich bereit, und auf dem rennenden Pferde, schief in der Luft, immer wieder kurz erzitterte über dem zitternden Boden, bis man die Sporen ließ, denn es gab keine Sporen, bis man die Zügel wegwarf, denn es gab keine Zügel, und kaum das Land vor sich als glattgemähte Heide sah, schon ohne Pferdehals und Pferdekopf. (S. 34 - 5)

新潮社一九五三年刊旧版カフカ全集第三卷高安国世訳

インディアンになりたい望み

ああアメリカン・インディアンになれたら！ ためら
いもなく馬にまたがり(1)、斜に空を截って、慄える大
地の上を幾度かまた短い身慄いを覚えつつ(2)、遂には
拍車をなげうつて、だつて拍車なんてなかつたから(3)、
遂に手綱をなげうつて、だつて手綱なんてなかつたから
(4)、そしてきれいに刈られた荒野のような大地すらも
殆どもう眼に入らず(5)、もう馬の頸もなく馬の頭もな
く(6)。(三五ページ)

新潮社一九八〇年刊決定版カフカ全集第一卷円子修平訳

インディアンになりたい願い

ああ、ぼくがインディアンだったらなあ、そくざに決
意して、疾駆する馬に打ち跨り(1)、斜めに空を切つて、
顫える大地の上で絶えず小さく身体を顫わせ(2)、つい
には拍車を捨て、だつてインディアンに拍車なんて要ら
なかつたから(3)、手綱を抛ち、だつてインディアンに
手綱なんて要らなかつたから(4)、行手の、たいらに刈
られた荒野のような大地もほとんど目にとまらず(5)、
もはや馬の頸も頭も消えて(6)。(二九ページ)

朝日出版社一九九七年刊初級教科書『ドイツ文法歌の花束』

岡野安洋石多正男野村廣之訳

インディアンになりたい望み

ぼくがインディアンであつたらなあ。直ちに準備して、
走っている馬にまたがり(1)、風圧に抗して身体を斜め
に傾け、震える大地の上で何度も短く身体を震わせ(2)、
そしてついには拍車を放り出し、だつて拍車などなかつ
たのだから(3)、そしてついには手綱を投げ捨て、だつ
て手綱などなかつたのだから(4)、そしてついには眼前
のきれいに草を刈られた野原である大地をほとんど見る
こともなく(5)、だつてもう馬の頸も頭もないのだから
(6)。(六二ページ)

角川文庫一九六三年刊『ある流刑地の話』本野亨一訳

インディアンになりたいと思う

インディアンになりたいと思う、油断なく身構え、疾駆する馬上に(1)、大気をななめに裁断する、小さざみにふるえる大地のうえを、くりかえしこまかく震動を続け(2)、やがてたづなをはなす、もはやたづなはないのである(4)、やがて拍車をなげうつ、もはや拍車はないのである(3)、かくて眼前にひろがる大地が、なめらかに刈り取られた草地と変ずるとき(5)、もはや鞍上人なく鞍下馬なし(6)。(四七ページ)「たづな・拍車はママ」

二〇〇六年刊白水Uブックス『カフカ・コレクション流刑地にて』池内紀訳

インディアン願望

インディアンだったら、すぐさま疾駆する馬にまたがり(1)、ななめに空を切り、ふるえる大地高く、はげしくからだをふるわせ(2)、ついには拍車を捨て、拍車など無用だからだし(3)、手綱も投げ捨て、手綱なんぞ無用のきわみだからで(4)、短く刈りとれた荒野もほとんど目にとまらず(5)、もはや馬の首も頭も消え失せてい

る(6)。(一一一ページ)

ちくま文庫二〇〇八年刊『カフカ・セレクションⅡ』柴田

翔訳

インディアンになりたいという願い

ああ、もしインディアンだったら、すぐにも走り抜けて行く馬に飛び乗って(1)、風に身を伏せ、揺れる大地に身も戦き、また戦き(2)、ついに足は拍車を離れ、だつて拍車なんかもうないんだから(3)、手は手綱を捨て、だつて手綱なんかとつくにないんだから(4)、目の前にはただ刈り尽くされた荒野のほか見えるものとしてほとんどなく(5)、気がつけば馬の首も頭ももうとつくに消え去って(6)。(一〇ページ)

なお、柴田翔の「訳者あとがき」には、「インディアンになりたいという願い」について次のようにある。「馬も消え、大地さえも消えてゆく。わくわくするリズム。絶対的解放の夢。(三〇六ページ)」

たしかに、柴田訳にのみ、「わくわくするリズム。絶対的解放の夢」が、明確にある。そして、それらこそ、ここでのインディアンごっここの奇跡が成立しおおせた時に、それがたんに無理を可能にする「ごっこ」の「ごっこ」としてできあが

ったということそのもののカフカの論理であるだけでなく、その持つ作品的意味、つまり、作品の値打ちとしてその全体へさらにかぶさっている意味である。そしてそれが、ここで述べるむつつの奇跡よりあとの、さらに最終段階での奇跡でもあるだろう。

三

ここでのむつつの奇跡とは、「ドイツ語圏の土地にいる子どもが、インディアンごっこに、ごっこの装備にならなすで、成功する話」であるばかりではなく、「ドイツ語圏の土地にいる子どもが、インディアンごっこに、ごっこの装備にならなすである。その各層の成り立ちと、全体の構造のことである。

むつつの奇跡がどういものであるかをも順次段階的に示しながら、まず、順に、冒頭からすべての文を見ていこう。ただし、含意される論理内容において、むろん翻訳例としては削除しないと補いすぎであるような部分は「□」に入れておいて、ことからの順のままにいまは解説風に示しておく。(カフカの地であるプラハのことはここではドイツと表記する。) 試訳に相当する部分を、いま小間切れにだが、二文字落として示しておく。(あとでまとめて、補いの部分も適宜処理して組み込みなおして、試訳として全体を再掲再提示する。)

またいま、まずまとまりごとに段落であるような体裁をとる。

【話の開始からひとつめの奇跡Ⅱ奇跡(1)のところまで、部分試訳。】

インディアンになりたい願い

「ドイツの少年であつてインディアンごっこをする者として、作者にいわば思考実験上で表象されている主体は、インディアンのアメリカの草地でなく、ドイツのなにもない荒地にいて、インディアンごっこのための装備をいつさいなにも持たないまま、インディアンごっこを始める。」インディアンであつたらなあ。「さてぼくはこのさいインディアンなのだから、インディアンならテントのすぐ外に馬をつないであるので、それにもう飛び乗ったつもりとなるのが可能であり、ここで足をパカパカツと馬足のまねの駆け足で踏み始めさえすれば、そしてそれでそのへんを走り回っていけば」もう馬の準備はできており、そしてぼくはもう馬上のインディアンだ(1)。

【ひとつめの奇跡の内容と構造は。】

これが、ひとつめの奇跡である。すなわち、テントのすぐ外に馬をつないであるので、ここで足をパカパカツと馬足の駆け足で踏み始めさえすれば、「ほかにごっこの準備がこの段

階でいらぬ」という事象と、「さつとこのインディアンが馬上の人となった」という事象とが、好都合にも、一致をしているというわけである。

だから、「gleich bereit」は、「ためらいもなく馬にまたがり」とか「そくぎに決意して」とか等々の訳（高安訳田子訳で言う）では、話の焦点がじつはそれるのである。

【そのあとふたつめの奇跡Ⅱ奇跡（2）のところまで、部分試訳。】

「ぼくがじぶんでばたばた走る」空気の中で「馬上のインディアンが馬上でスピードに抗してとる身の構えを模倣して」斜め「前」に身を傾ける。「さて、そのさい、スピードのある走りで馬が震えるということは、馬の下で大地が震えるということであり、震える大地のつもりとなるために、」繰り返かえしぼくは、震える大地の上で、小さきみからだを震わせた（2）。

【ふたつめの奇跡の内容と構造は。】

これが、ふたつめの奇跡である。つまり、あたりまえだが、大地は震えず、また、馬の震動そのものによってならば馬上の人もむろん震えるけれども馬が走って馬が震えることそのものは馬上の人が震えることではない。ところが、ここでは、いない馬が作り出される。いない馬が作り出されるために、

まず、その空無の馬でなく、大地が、馬として、震えるのである。そして、大地が震えることを（大地もぼくがほんとうに震わせることはむろんできないのだがそのかわりに）作り出すために、馬足のまねのパカパカ足でそのへんをじたばたとここまで走り回っていたぼくは、ここで、同時にその駆け足を、上体をブルブルと小さきみに、まるで出来の悪い馬鹿犬が走るさいに四本の四つ足に加うるに頭と尻尾まで合わせて六本を、まったくてんでばらばらに、狂ったように互いに無関係にばたばたさせているのがときどき公道に飼い主といるけれどもあたかもそんなへんてこなぐあいに、たぶん、頭などをことごとく小さきませるまでに、肩や背中などを自然に大袈裟にたいそう、小さきみに震わせつづけるという動作を、それに付け加える。いない馬が作り出されるために、大地が震えることの演出として（馬上のぼくが直接に震動することではなくて）、パカパカ足で走り続けているぼくが、無理にひどくからだを揺する。このことにより、ぼくでなく大地が震えていることとなり、そして、大地でなく馬が震えていることとなり、そして、震えている馬は存在していないことは不可能でありむろんまさしく存在していることとなる。だから、すでにいた馬は、いまや、「より完全にいる」のである。

これも、奇跡といえないほどの、言ってみれば通常のだれもによる「ごっこ」においてなされる「やつし」の基本の域を出ないものと、同型でもあるのである。ところが、ここは

あきらかにこういう面倒な構造と「そのもってまわったありかたの中でのことからの昂進」を内在しているのであり、だから、「繰りかえし」「小さきみからだを震わせた」とのことのさらの能動的行動となるのである。(馬上のひとが受動的にもむろん震えることの演出だけであるならば、そもそもパカパカッ足でいることによりあたりまえだが上体も通常じじつに震えているだけで、十分であるはずであり、そのことが、上掲各既存和訳において、「über dem zitternden Boden」と「immer wieder kurz erzitterte (主語 man が「」に省略)」ということばが、この短い全体の中でわざわざ繰り返されていることでの処理に持て余し気味である理由である。つまり文から受ける無意識の意味感覚を、このように意味を腑分けしなければ、読みを処理でききれていないこととなるわけである。)

【そのあとみつつめの奇跡Ⅱ奇跡(3)のところまで、部分試訳】

そしてとうとうぼくは拍車を放り出した。だって、拍車は「このインディアンにはもともと」なかったのだから。(3)

【みつつめの奇跡の内容と構造は。】

「」で、ぼくはこのインディアンが付けていたはずの(拍

車を付けていたということに、いま、して)その拍車を、放り出したことにした。

「だって」(「denn」)！

拍車を放り出したインディアンのぼくは、いまや、拍車を付けていないのである。ところがそこで、一気にさらに転換して、「ぼくはいまや拍車を付けていない」ことを、「このインディアンは、はじめから拍車を付けていなかったのである」ことにする。はじめから拍車を付けていなかったのだ「から」、いま、拍車を当然に付けていない、のである。いま、ぼくが拍車を付けていないことは、「このインディアン」として、はじめからの正確な姿を、突然にして、よりトレースでき実現できていることとなる。

この「だって」ということばの使い方と、それがこういう意味をなすものであるということとは、まさに、カフからしい「ことばにおける奇跡」と言うに、ふさわしい。ひとつめ・ふたつめの奇跡と、いつつめ・むつつめの奇跡に気がつくなくとも、この「だって」の、通常のなんの変哲もない言語的意味からすると理解不能であるようなこの意味には、この作品を理解するにいたる読者はまず最初に、気がつくはずである。最も典型的で、かつかなり把握しやすい、カフ力的論理である。

ここで、通常の「だって」である並列接続詞の「denn」でなくて前の節との関連づけのためにあとの節の中に置かれて

使われる副詞の「denn」、しかもそのような用法のうちでも、「だって」と同様に特殊から一般へと関連づけがおよぶ、「wie denn überhaupt (なにしろ〜であるから) (多分にもれず)」のかたちとは、関連づけの接続が逆となり、一般から特殊へと関連づけがおよぶ、「denn auch」「denn noch」(「前述のことから判明するとおり、果たして、じっさいまた」)のような意味に、この「denn」を理解したのが、本野訳だろう。(また池内訳も「だし」がその本野訳「もはや」と同じ、「果たして」との特殊へ・結果へ接続させる感じ——からの作文——かもしれない。)だが、その副詞の「denn」は節の冒頭にはくることができない語順での用法であるので、ここの「だって」がどうしてだつてでありうるのかの構造を追わずそのような理解へ逃げることは不可能である。また、田子訳「要らなかった」池内訳「無用」は、「es gab (あった)」「否定が加わっている」を「es mußte geben」であるかのような、「müssen」(必然)が加わった意味のように、変えてしまっていることになる。「こと」がらが、強い必然性をはらんでいるのであるから、müssen という助動詞がなくとも、おのずとこのことばを必然のような語を加えて訳してもことがらは誤りとはならない」との考えなのであるが、それだところこの「だって」の「一般・原因」がうしろの節で言われるという接続での、論理がすり抜けてしまい、つかみそこねとなる。「放り出したから拍車がなくなった」という事態を、一気に

転換しつつ、「はじめから拍車がないインディアンだったからいま拍車がないのが真正さの証拠だ」という事態と、「一致させる」。通常思いもよらぬ「奇跡」なのである。

【そのあとよつめの奇跡Ⅱ奇跡(4)のとりろまで、部分試訳。】

そしてとうとうぼくは手綱を投げ捨てた。だって、手綱は「このインディアンにはもともと」なかったのだから。(4)

【よつめの奇跡の内容と構造は。】

みつつめの奇跡とこのよつめの奇跡は、まったく同じ構造からなりたっている。だがじつは、ただ同じ構造を繰り返したというだけではないのだ。じつは、そこには、構造が同じであるにもかかわらず、内容としての昂進があるのである。というのも、拍車は、カウボーイでなくともインディアンでも、馬に乗るならば、それぐらい付けているかもしれないのではあるが、馬に乗るために必須であるとはいえない。インディアン馬ならば、乗り手の頭が羽のかざりならば、もともと拍車はナシで、乗りこなしているかもしれない。ところが、手綱は、それがなければ野性の裸馬をなだめすかして乗っているのと同じく変わらぬような、かなりの、必需品である。拍車がなくとも構わないが手綱がないと困りそうで

ある。それなのに、同様のことをもういちど繰り返したただけであるかのような調子で、内容上、はるかに進展した、異質などころへまで、一気に進んでしまう。すなわち、ここにも、ただならぬ昂進が内在しているのである。

そして同時に、このみつつめよつめの奇跡での、拍車と手綱とは、じつは通常のインディアンごっこ遊びのさいの装備として、用意されそうもないものだ。だいたいまし用意しても、拍車と手綱となど、馬がじつさいにはそこにいるわけでもないごっこなかで、用いての遊びようがない。ところが、そういうもののことを観念の上で持ち出すことにより、このみつつめよつめの奇跡では、うまいぐあいに、「無い」ものが「無い」ことによって「ぼくが、より真正に、インディアンになりおおせている」ことを、成立させる役目を果たしている。いちばんどうでもいいような（用意もされるわけもないような）小道具が重要な役割を果たしているという事態そのもののなかにもまたひとつ、ことがらの、昂進があるのだ。

また、あたりまえだが、ここがたとえば人馬一体の境地に近づいているというようなことや人間が馬をけしかける拍車や馬をあやつる手綱がないのが人間による馬支配がなくて人馬主客渾然であるというようなことはあるわけもない。それを言うなら、もともとぼくの足がごっこそのものの当初段階からパカパカッ足で馬の足の役を果たしているし、たとえば

より完成したケンタウロスのようなものなどになるというようなことでもありようがなく、およそもとより推定されるどんな論理であろうともここではごっこはインディアンであることそのものをめぐっているのである。（そうであるから、内容を見るなら、いきつく方向はそれの完成だということ、各段階はそれの昂進だということがおのずと見えてくるわけである。）

さらには、ここでこのみつつめよつめの奇跡が表面上は同型で繰り返されているということが、もし一回だけならば読む眼があまりにも速くさつとすぎて見過ごしてしまったかもしれないカフカ読者に、いや待てよ、この「だって」は離し捨てたものがただ無くなるだけ以上にはストーリー上の論理を内在するぞ、なにがしかの特有のカフカの論理を構成しているはずだぞと、理解をわかりやすく導く、印象的な道しるべともなっていよう。

【そのあとみつつめの奇跡Ⅱ奇跡（5）のところまで、部分試訳】

そして目の前の「ドイツの、なにもない土むきだしの」荒れ地を、「馬には草をやらないといけないのだから、馬を持つインディアンが馬に草をやるために」きれいすつかり草を刈ってしまった「インディアンの草地の」原野である「ことにしてその」つもりで見ると、もうそのと

たんに、「こう（＝ここに）後続する部分内容」だ。」（5）

【5つめの奇跡の内容と構造は。】

この試訳中、「見ると、もうそのとたんに」は、従属接続詞である「kaum」（＝英語「no sooner than」）である。

むしろドイツ語のこの単語は、英語「hardly」である準否定の副詞の用法もある単語である。ところが、いずれにせよこの文では主語 man がまた省略されているわけのだが、その省略された主語 man をどの位置におきなおうとも、「und kaum das Land vor sich als glattgemähtes Heide sah,」の動詞「sah」がこの位置にあるかぎり、「kaum」が準否定の副詞でありうるための定動詞第二位の主文の語順を構成することはすでに不可能なのである。したがって、これは「und kaum man das Land vor sich als glattgemähtes Heide sah,」つまり（主語「man」を補う箇所は「kaum」の直後であり）定動詞後置の従属接続詞の副文の語順であることしかありえない。だから、高安訳円子訳等々での、「殆どもう眼に入らず」「ほとんど目にとまらず」という読みは、不可能なのである。それを、そういうこれらの訳がそういう解釈をとったのは、「見ると、もうそのとたんに」ととったばあいの前後の内容が、理解できないと見えたためであろう。

ところが、このいつつめの奇跡は、じつはいちばん、意味が完備している内容であると読みとることができるのだ。す

なわち、ドイツにいるぼくの目の前の土地は、じつさいはなにもない土むきだしの荒地であるのだ。ところが、それを、「glattgemähtes Heide」（「きれいすっきり草を刈ってしまった原野」）であるものとしてぼくは見るのだという。その意味はまさに、「インディアン」ごっこをしているぼくの、目の前のドイツの、なにもない土むきだしの荒地を、馬には草をやらぬといけないのだからまさに馬を持つインディアンが馬に草をやるためにきれいすっきり草を刈ってしまった、インディアン草地の原野であることにして、そのつもりで見ると」なのである。

さきほどのみつつめよつつめの奇跡が、カフカの論理としていちばんあざやかな切り返しを示していたものであるのたいして、このいつつめの奇跡が、むつつの奇跡の中で、できすぎてそれ自体は馬鹿馬鹿しい、子どもっぽい、詰まらぬいほどまでに、意味がこの内部そのものにおいては、完備し、完結した、構造内容からなるものである。しかし、いちばんできすぎているから逆にたったそれだけのものでもしかないかのようなこのいつつめの奇跡は、これだけの役しか果たしていないわけではないのだ。

つぎの、むつつめの奇跡は、このいつつめの奇跡の背後で、このいつつめの奇跡をなかだちにして、あるいは言いわけにして、あるいは目くらましにして、そのかんに起こる。そのことが、「kaum」＝「〜のつもりで見ると、もうそのとたん

に、そのかんに「なのだ。その意味ではここでも事態は、より奇跡であるものへと、フリードリヒ・シュレーゲルの合言葉シェリングの合言葉顔色なきほどさらに昂進累進累乗するいっぽうである。

【そのあとむつつめの奇跡＝奇跡(6)のところまで、部分試訳。】

そのとたん、そのかんに、「このように完璧ななぞらえがいまできたばかりであるのだから、その論理の水準はそのまま続いているわけであって、ついては、さきほどの拍車と手綱とが、無かったことがぼくがより完全にインディアンであることであるのと同じしくみにより、「すでに馬の首も馬の頭もここになく、だから馬の首も馬の頭もないがゆえにもはやぼくは、いっさい完全無欠の、馬に乗って走っているインディアンになりおおせたぞ！

(6)

【むつつめの奇跡の内容と構造は。】

このむつつめの奇跡が、最大限にカフカらしい論理ではある。しかし、綱渡りの、無理を道理に変えてしまうことのおおのみでできた、論理である。

さきほどの「Kaum」が効いて、またそのいつつめの奇跡が詰まらないほどに出来すぎつきすぎであったことが逆にここ

で効いて、「そのとたん、そのかんに」ということになる。そして、「このように完璧ななぞらえがいまできたばかりであるのだから、その論理の水準はそのまま続いているわけであって、ついては、「ということになるのだ。さきほど述べた、「このいつつめの奇跡をなかだちにして、あるいは言いわけにして、あるいは目くらましにして、そのかんに起こる」、むつつめの奇跡自体の、内在的構造である。

むつつめの奇跡たる、いますでに（だがむろんもともと）「馬の首がない（ohne）＝英語「without」」「馬の頭がない」ことが類比されるのは、いつつめの奇跡をまたいで、むつつめよつつめの奇跡たる「拍車がない」「手綱がない」「しかるにそれゆえにぼくはより完全なインディアンである」であること、「いま馬の首・馬の頭がないがゆえにぼくはより完全なインディアンである」との論理のみちゆきであることになるほかはない。だが、さきほど見たように、「だって」の切り返しのカフカ独擅場のあざやかさによって、そしてそれだけでなく「拍車がない・手綱がないインディアンはそれはそれではじめからありうる」ことによって、むつつめよつつめの奇跡は内容上も可能であったのだ。ところが、じじつにおいて、「馬だけ先に大砲の砲弾にあたって馬の首と頭とが一瞬早く吹き飛んだあとの瞬間像においてなどというのではむろんなくふつうのインディアンのごっこ想定であり）馬の首・馬の頭がない、馬に乗って走っているインディアン」と

いうものは、あらかじめ、ありうるわけがないのは、わかりきったところである。それにもかかわらず、いま見た、「このように完璧ななぞらえがいまできたぼくであるのだから、その論理の水準はそのまま続いているわけであって、ついては、さきほどの拍車と手綱とが、無かつたことがぼくがより完全にインディアンであることと同じしくみにより」ということが、「Kaunが効いて」また「そのいつつめの奇跡が詰まらないほどに出来すぎつきすぎであったことが逆にここで効いて」、まさしく構造において、可能となっているのである。

その結果、むつつの奇跡による昂進の完成は、「だから馬の首も馬の頭もないがゆえにもはやぼくは、いっさい完全無欠の、馬に乗って走っているインディアンになりおさせたぞ！」として結実した。「ごっこの装備なにもなしにもかかわらずでなく、ごっこの装備なにもないからこそ、完全なインディアンになることに成功する」、全体の奇跡である。

【全体をまとめての、試訳（まだ補い気味にしたので、もっと短くしうるだろうが）】

インディアンになりたい願い

インディアンであつたらなあ。インディアンならテントのすぐ外に馬をつないであるのもう馬の準備はできており、だからパカパカ馬足をしさえすればぼくはも

う馬上のインディアンだ。じぶんではたばた走る空気の中で馬上の身の構えを模倣して斜め前に身を傾ける。馬が震えるということは、馬の下で大地が震えるということであり、震える大地のつもりとなるために、パカパカ馬足をしながら繰り返すぼくは、震える大地の上でがくがく大袈裟にたいそう、小きざみからだを震わせたが、その震えはぼくでも大地でもなく、馬の實在だ。そしてとうとうぼくは拍車を放り出した。だって、拍車はこのインディアンにはもともとなかったのだから。だからぼくはもつとインディアンになった。そしてとうとうぼくは手綱を投げ捨てた。だって、手綱はこのインディアンにはもともとなかったのだから。だからぼくはもつとインディアンになった。そして目の前のドイツの、なにもない土むきだしの荒地地を、馬を持つインディアンが馬に草をやるためにきれいすつかり草を刈ってしまったインディアンの草地の原野であることにしてそのつもりで見ると、もうそのとたんに、——そのとたん、そのかんに、このように完璧ななぞらえがいまできたぼくであるのだから、その論理の水準はそのまま続いているわけであって、ついては、さきほどの拍車と手綱とが、無かつたことがぼくがより完全にインディアンであることであるのと同じしくみにより、すでに馬の首も馬の頭もここになく、だから馬の首も馬の頭もないがそれゆえ

にもはやぼくは、いつさい完全無欠の、馬に乗って走っているインディアンになりおさせたぞ！

たとえばテレビドラマで父親が息子にせがまれて音読する国語の教科書の一節に「手をつないでジャンプして空を飛ぶ」と脈絡なくあると、小学教科書だから単純に空を飛べる人種の任意の離陸場面ではなくて「手をつないで」ゆえに「空へそのまま飛び立てる」意のテキストであるということがいっさいの説明なしに視聴者にわかるのと類似のことがらにさいして、カフカにおいては最低限、断章集『罪、苦悩、希望、真の道についての考察』四十五番（一九一七年）での「空虚でたのしい走行」のように、独楽を回すときには回す技能によつて独楽が回し紐を離れてこそしかし紐で回したゆえにうまくそのまま回るそのしくみが、提示される。「空虚でたのしい走行」では、馬車に「たくさんの馬をつなぐほど、早いことその具合になる」、横木が台車からはずれて「しまう不可能なことでもなく馬をつなぐ」革ひもが切れて、それによつて、空虚でたのしい走行がおこる。速度と震動の幻想の中で馬車が馬から、紐を離れる独楽が独立して回り続けるように独立して、震動をも脱して宙に放たれ宙を進み続けるかのように、意識の中で、「空虚でたのしい走行」へ入ることが、《構造のメカニズム》は含まないながら、《構造の委曲》を持って、提示されるわけである。（そこでは馬から離れてしまった馬車の

その走行が、《からっぽ》の走行であるせいで続くのであり、ゆえに「空虚でたのしい走行」をなすことが、——紐で回された独楽が回りつづけるように、しゃぼん玉が形成時にあつた縁端を消去して球形となり自己根拠的にみずからをささえる円環球面をなして浮かんでいつづけるように——、できるのだった。）ところが、ここ「インディアンになりたい願い」では、《構造の委曲》をもむろん尽くしつつ、それが、論理の奇跡の各段階とその全体の構造とからなる、《構造のメカニズム》の満幅を尽くしながら、まさに読者の眼前に、示されているのだ。

これが、カフカの論理なのである。

これが、カフカなのである。

そして、——ここで触れた先人の先訳の先駆的訳業はともかくとして——この国の現今の社会全体の閉塞の中で典型的な社会的風潮の一端としてドイツ文学研究に携わる若いひとたちのあいだに、もし、このカフカでなくて、先人たちの訳業のうちこのカフカの論理でない緩慢な中途到達を示しているものからもさらに逆行した、俗世間にカフカを単調に完全に還元するような風潮があるとすれば、あるうことかカフカをひきあいに文化の肯定的性格の顔を平気で演じているとすれば（もともと演じさせられているとすれば、だが演じさせられていることにほとんど半分は自分から同化しているとすれば、とはけつきよく、最低限リベラル以上級に民主主義を

支持しているつもりでいるくせ何も考えずに文化の肯定的性格そのものをカフカをだしにして体現してしまっている（すれば）、それはいいさ、断じて、カフカではないのである。

だが、さらに、カフカは、これだけではない。

すでに触れたが、柴田翔の言う、絶対的解放が、ここには同時にあるのだ。

それは、しかし、——たとえばここでのインディアンになりきるべくに即して言うならば——馬も消え、大地さえもが消えてゆく絶対的解放感であるだけではない。——それであるだけならば、たとえば「ぼくがけつきよく、大地の上でぐるぐると駆け廻ってみたあげくに、そのままそこへ寝そべり、空を見上げている、そのさいに、もはや馬も大地もインディアンもぼくもない、そのうれしさ」というのみであるのと、結果的に変わらない。そうではない。それだけではない。

カフカの不可能を可能にする論理の奇跡は、同時にそれに、また、ここで示したカフカの論理に重なりつつ、生活上のちよつとした感覚が芸術的に転換充溢されるものである。しかもそれは少なくとも感覚的事実として、それを超えて、社会的なものとして歴史的全世界と現実生活にひろがるものである。

それは——その最高到達点は『却下』（長い方の作、一九二〇年から一九二二年に成立、初期の短篇集『観察』中にある同名の短いまったく別の作品ではない方、別に詳述したと

おりの、最大の着目点であり、カフカの作り上げたものとして最大の成果となっている精巧なくみに（において）の空気に実現しているが——、カフカ全体に見られるものであり、こどもでもそれが、奇跡各層と作品構造とにおいて端的に奇跡が昂進的に成立している全体の意味と重なって、典型的なかたちで、できあがっているのである。

Stufen der Wunder und Konstruktion des Ganzen vom Wunsch, Indianer zu werden
— Ein Problem der japanischen Übersetzung Kafkas —

Tsuyoshi MINAMI

Resümee

Die berühmten sechs Übersetzungen von Kafkas ‚Wunsch, Indianer zu werden‘ (durch Takayasu, Maruko, Ikeuchi, Shibata usw.) enthalten Unstimmigkeiten, die nicht zu den komplexen Strukturen des Werkes passen.

In der vorliegenden Abhandlung werden die Strukturen der jeweiligen Stufen des Werkes als „sechs Wunder“ interpretiert. Gleichzeitig wird eine angemessenere Übersetzung präsentiert.

Es sind nicht so sehr diese älteren Übersetzungen als vielmehr jüngere Germanisten hierzulande, die zwar zur Verfasstheit der japanischen Gegenwart passen, jedoch Kafka völlig entgegenstehen, indem sie sein Werk ganz auf den Alltag der affirmativen Bürger zu reduzieren neigen. Worauf Shibata aber in seinem Nachwort der Übersetzung richtig hinweist, hat Kafka nicht nur in diesen Wundern Sinn, sondern vielmehr auch in der Stimmung der vollständigen Freilassung, was sich dann literaturgedanklich zur sozialen Ästhetik der absoluten Befreiung hin entwickelt.